東北アジア青銅器文化の形成

1．東北アジアの青銅器文化論

これから東北アジアにおいて、どのようにして青銅器文化が形成されて行ったか、そのメカニズムは何かという点についてわたし自身の考えをお話し致します。

皆様方はすでにご承知のように、考古学では人類の歴史を、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三時代に区分しています。石器時代は更に旧石器時代と新石器時代に細分して、新石器時代には人類は穀物を栽培し、動物を飼育する生産経済に入った段階と認定しています。これに対して青銅器時代には文字が発明され、一定の領域を含む政治的な支配組織が確立して、人類が新しい段階に進展したと考えられています。従いまして青銅器時代あるいは青銅器文化の研究の意味は、その地方において領域的な政治的社会がどのように形成されたかをみることで、その地域の歴史の発展段階を把握することです。中国の中原に展開した高度な青銅器文化に隣接する、東北アジアでどのようにして青銅器文化が形成されて行ったかをみることは、ひいては韓国、そして日本での政治的社会がどのようにして作られて行ったかを知るうえで、無視することのできない重要な意義をもっていることは、改めて申すまでのことはないでしょう。

東北アジアにおける青銅器文化の研究は、中国の青銅彝器を中心とする独特な青銅器文化がどのようにして形成されたかという論点から出発致しました。その際には東北アジアはユーラシア北方の草原地帯と同一の文化グループとして扱われて、研究が進められてきました。マックス・レール（Max Leohr）はシベリアの青銅器文化が年代的に古く、その影響下に中国の青銅器文化ができあがったと想定しましたが、カールグレン（Karlgren)、やイェトマール（Yettmar）は中国の青銅器がシベリアのミヌシンスク盆地の青銅器よりも絶対年代は古くなり、中国の青銅器文化はオリエントやシベリアとは無関係に形成されたとみていました。

戦後になり、ソヴィエトの学者によるシベリアの青銅器文化の研究が進んできますと、中国や東北アジアに共通してみられる青銅短剣などは、決して古いものではなく、カラスク期の後半期、すなわち紀元前11世紀から10世紀にかけての頃に成立したことが分かってきました。すると中国においての青銅短剣のほうが年代的に古くなり、起源論においてはシベリアの青銅器文化は考慮しなくてもいいようになってきました。その結果、青銅製の武器を中心とする長城以北の青銅器文化と、青銅彝器を主体として戈や車馬具をもつ中原的な青銅器文化がどのように係わりあいを持っているかという点に論点が絞られてきて、今日では東北アジアで独自に青銅器文化が形成されたとみる見解と、中国の中原文化の影響の下に、東北アジアで特異な青銅器文化が開花したとみる説に別れています。

中国東北アジアの青銅器文化を研究する学者の中で、年齢の高い人は中原との関係を重視し、若い世代には独自説が多く見られます。すなわち新石器時代以来のその地方の生活の中で育まれた道具を基にして、それを青銅器に移し変えることで、中原とは異なった青銅器文化が成立

したと解釈するのであり、最近ではこの説が有力になってきています。

2．河北省の燕関係遺跡

この問題を考えて行くうえで重要な鍵を握るのは、中原地帯と長城以北の東北アジアとの中間地帯における、青銅器文化の実態です。最近中国では北京周辺での考古学の調査が盛んに行われ、西周初期の大規模な遺跡群が明らかにされつつあります。北京の西南、房山県董家林では「コ」字形に巡る都城址が発見されています。完全に残っている北側の壁の長さは829m、東と西側は約300m確認されています。遺構の切り合い関係から殷代に遡上する年代が想定されていますし、同じ北京の劉家河では殷代後期の大きな墓が発掘されていますので、紀元前12～11世紀ころには、北京周辺は殷の文化的な影響があったことが知られます。

そして董家林に隣接する黄土坡という台地上には西周の時期の大規模な墓地群が発見されまして、殷の安陽で見られるような墓の構造が明らかにされてきました。この琉璃河で出土した青銅器には銘文（文字）が刻まれていて、それを判読することでこの墓地の性格を掴むことができます。代表的な例文を見て行くと次のようなものがあります。

（1）M52号　鼎　侯が復に貝3綴り賜った。このため復は父乙の宝器を作った。

（2）M52号　尊　匽侯が復に衣服、男女の奴隷、貝を賜った。このため復は父乙の宝器を作った。

この銘文はM52号の被葬者は復という人物で、匽侯に仕えていたことが分かります。匽は燕の古い字体ですから、西周初期に燕に封建された召公一族と関係することも知られます。

（3）M53号　簋　匽侯が攸に貝3綴りを賜った。攸は父戊の宝器を作った。

攸は修と同じです。「～の記念に父の宝器を作った」という表現は殷に関係するものですから、先の復もこの攸も殷と繋がりの深い人物であったことが分かります。

（4）M251号　鬲　戊辰という所で匽侯が白矩に貝を賜ったので、父戊の宝器を作た。

（5）M253号　鼎　匽侯が堇という人物を宗周すなわち今日の西安に行かせ、太保に貢物をした。太保はこれに対して堇に貝を賜ったので大子の癸の宝器を作った。

太保は初代の燕の封建領主である召公奭のことです。これと関連する青銅器として日本の京都にあります泉屋博古館に戦前収蔵された鼎の銘文に「匽侯旨が初めて西安に行って召公奭に挨拶した。奭は召公の旨に貝20綴りを賜ったので母の宝器を作った」というのがあります。すると北京に実際に赴いたのは奭の息子である「旨」で「旨」が匽侯と呼ばれていたことが知られます。

（6）M193　罍　王が太保に言うには、太保は清明な気持ちで祭政を行ったのでその行いに対して「克」を侯にして匽の領主にしてあげよう。

次の史から克までは様々な読み方が考えられ、統一できませんが、終わりの文言は「匽の地に入って祭政を行い、その記念に宝器を作った」とあります。この銘文の「克」を名詞に採るか助動詞に採るか意見が別れます。名詞とすれば匽侯の名前は「克」になり、助動詞に採れば

太保を匽侯に任じたことになります。

このように北京周辺には西周初期（紀元前10世紀頃）の段階に既に中原的な政治勢力が及んでいたことが知られます。またその青銅器文化の内実は、墓の副葬品でみるように中原それも殷文化に共通する要素を強くもつものですし、青銅器に刻まれた銘文からも、殷と関係の深い集団であったことが知られます。

3．東北アジアの埋納遺跡

この燕の墓から出土した青銅器と全く同様なものが、実は東北アジアの南部の各所で発見されています。それらは北京市の蘆溝橋、牛欄山、内蒙古の牛波羅、敖包山、遼寧省の北洞村、山湾子、馬厰溝、少波汰溝、木頭城子、大廟、花爾楼、吉林省天宝同遺跡などがあり、その他に喀左県の南溝屯で1941年に発見された鼎がありますが、その出土状況がよく分かりません。これらの遺跡を地図のうえにドットを落として行きますと、シラムレン河の南、遼河の西の一帯に広がっていることが分かります。

これらの遺跡から出土した青銅器の銘文をいくつか拾いあげてみますと、山湾子の簋には「白矩が宝器を作った」とありますが、この白矩は琉璃河で出土した「白矩」と同一人物と考えられますので、燕と強い関係があることが分かります。また馬厰溝で発見されました盂には「匽侯が飯盛器を作った」という銘文がありますので、ますますそのことが確実になります。

このような青銅器が多数一括して大地の中に埋められるという現象については、様々に解釈されますが、もっともふさわしいのは、その地方を征服した証として記念の青銅祭器を埋め、天地の神に祈りを捧げる儀式が行われたとみる見方です。すなわち北京に封建された燕は、それに反対する勢力を駆逐して遼河以西まで進出したことを物語るものです。こうした青銅彝器ばかりを一括して埋納した遺跡の他に、青銅製武器だけを埋納した遺跡も発見されています。それらには、河北省少河南村、抄道溝、遼寧省楊河、二十家子、波拉赤、稍戸房子村、撫順市、大紅旗、柳湾などがあります。これらも一例を除いて全て遼河の西側に分布しています。これらの遺跡から出土する青銅製の武器は従来殷の時代の物と判定されていましたが、さきに述べた北京周辺での西周の遺跡で発見される青銅製の武器に類似することから、西周の初期の段階のものであり、青銅彝器と同様に征服記念として土地の精霊を鎮めるために大地に埋納されたものであることが分かります。

4．青銅器埋納遺跡の年代

これら燕と関連する青銅器の埋納遺跡の年代はどのように考えられるでしょうか。青銅器そのものの型式からは、殷代に遡上するものもありますが、多くは西周の初期のものであることが、その銘文によって知られます。なお細かくみてゆくと、大きくは２つの時期に区分できそうです。青銅器の埋納遺跡それ自体からはなかなか判断はつきかねますが、北京の琉璃河墓地で発見された例では、青銅器の組み合わせによって西周初期でも、成王の時期と、康王の時期

に分けることが可能です。

琉璃河Ⅰ区の墓地では、副葬品として土器の鬲、缶の数が接近してセットになるグループと缶だけが副葬されるグループが見られます。そして前者の墓では青銅器の鼎、簋、罍、尊、爵、觶などの「礼器」のみで、副葬品が構成されるのに対して、後者の墓では青銅製の礼器の他に戈、剣、鉾などの武器が多く出土します。これらのことは、時期的な違いを示すものと考えられ、それぞれ成王期と康王期に比定できます。琉璃河の墓地を2時期に区分しますと、

成王期　M50，M54，M1043，M1193

康王期　M52，M53，M251，M253，M1029，M1055

となります。

こうした琉璃河墓地の年代区分を東北アジアの青銅器埋納遺跡に当てはめて行きますと、牛欄山、北洞村と山湾子の一部が年代的には古く、山湾子の一部、馬厰溝、それに蘆溝橋の例が康王期に該当します。その他の埋納遺跡については中国の学者が詳しく報告していませんので、分析することができません。

上で述べた埋納遺跡が戦勝記念であるとすると、燕による東北アジアへの進出は、成王と康王の2時期に別れて行われたことを物語ります。いまのところ「匽」もしくは「匽侯」の銘文をもつものは康王期のものに限られることが分かります。

河北省や遼寧省で出土するこの時期の青銅器には、人物名もしくは種族名と考えられるものが多く見られ、しかもその殆どが燕に結び付くものか、殷に関係するものです。すなわち、燕の召公奭やその子弟は殷の遺民を率いて、東北アジアに遠征したことが知られるのです。ちょうどこのころ周公旦が殷民六族を率いて魯国に封建されたのが良い例になるでしょう。燕に率いられた人々の名前は次のようになります。

山洞村　成王期　亜微、冉、ぶん、亜㠱侯矣

山湾子　成王期　魚、史、尺、舟、車雋、戊

山湾子　康王期　戌、白矩、叔尹、尹、倗万、覃伯

馬厰溝　康王期　魚、蔡、史伐、戈

このように様々な名前が出て来ます。しかもその殆どが殷に繋がりの深い物であることが、殷関係の遺物に見られる銘文にしばしば登場することで窺えます。

このようにして、東北アジアに青銅器が登場するのは紀元前10世紀に西周の召公一族を中心とした勢力によって、この地方が征服された結果として、出現したことが想定できます。しかもその燕の勢力の主体をなしたのは、その名前にみられるように殷の残存勢力であったことがあきらかであり、胡のはらない戈など、殷の都である安陽で出土するものと類似した武器が登場するのもうなずけましょう。

5．匽侯関係の遺跡

青銅器に刻まれた人物名あるいは種族名の分析をもう少し続けて行きましょう。西周初期の

青銅器にみられるこうした名前をみてゆくと、どうも殆どが㠱侯に関係する者が多く見られます。山洞村の鼎にある銘文にはその銅器の最後の「亜㠱侯矣」とありますから、㠱の一族であることが分かります。また北京の牛欄山でも「亜㠱侯矣」の銘文がある。山洞村や牛欄山遺跡は青銅器の埋納遺跡のなかでも、最も古い段階の物です。更にやや時代の下る蘆溝橋や馬廠溝では「亜㠱侯矣」の銘文をもったものがあり、琉璃河墓地でも㠱に関係する青銅器が出土しています。すると召公一族による東北アジアへの進出においてはこの「㠱侯」が大きく係わっていたことが推定されます。このことは必ずしも㠱だけによる東北アジアへの展開を物語るものではありません。少しは㠱関係以外の青銅器も出土しますし、この㠱については蘆溝橋出土の青銅器の銘文に「匽侯が亜に貝を賜ったので、父乙の宝器を作った」「亜㠱侯矣」とありますから、あくまでも燕の封建領主である召公の支配下にあり、その指示によった行動であったことを窺わせます。

この㠱については、殷の甲骨文字にも登場しますし、殷の有力な支配階層を形成していました。またこの㠱は箕と解釈されますので箕子朝鮮とも繋がりのあるもので、以上述べた青銅器の埋納遺跡を取り上げて、東北アジアに紀元前10世紀に「箕子朝鮮が実在した」と説く人もいます。

㠱に関係する青銅器が出土するのはこの時代だけではありませんし、もう少し広い範囲に分布しています。それらを年代順に挙げてゆきますと、つぎのようになります。

西周初期	陝西省斎鎮村	㠱女
	山東省益都県	㠱侯亜矣
西周末期	山東省煙台市	㠱侯
春秋前期	山東省南埠村	㠱白

このほかにも春秋期から戦国期にかけてのころ、山東省の東半分で矣侯に関する青銅器が多く出土しています。このため、私は東北アジアに西周もしくは殷代の後期に箕子朝鮮が存在したとは考えません。北京以北の各地にみられる矣侯関係の遺跡は青銅器の埋納遺跡であり、あくまでも燕がこの地方に進出する時期に関係して出現するものであることは、これまで述べて来たことでお解りでしょう。そして蘆溝橋や益都県での銘文にみられるように、召公の支配下にあったこともみてきました。このうち益都県の例は墓出土品であり、埋納遺跡とは性格が異なって、その土地の近くが㠱の領土であったことを物語ります。さらにこの山東省の東半分から引き続いて㠱侯関係の青銅器が戦国期まで出土することは、この地域に㠱関係の国があったことを示すものであると考えます。

㠱氏は姜（羌）姓ですから、本来は山西か陝西地方にいた氏族であったと思われます。「周公は東海の人なり」と記す文献もありますので、あるいは殷末に周公坦一族とともに、山東地方へ移住させられたのかもしれません。この㠱が殷の有力な集団のひとつであったのが、周の武王による殷の打倒行動に加担して、召公奭の下で、東北アジアの平定作戦に加わって、青銅器の埋納遺跡を東北アジアへ残したというのが、実情でしょう。その功績により山東地域に箕

国として封建されたものと考えられます。『漢書』「地理志」に「琅椰郡有箕県」とあるのはこれを正確に伝えたものと思われます。

終わりに

箕侯関係のことで少々横道にそれましたが、これまで見て来たように東北アジアではまず、殷末に青銅器文化の余波が及び、本格的には西周初期、紀元前10世紀に燕による進出という形で、青銅器文化が成立いたしました。その内容はみてきましたように、中国の中原地域と基本的には同一のものとみて差し支えありません。この地方に独特な青銅器文化が開花するのは、燕の勢力が衰える西周の末期にならなければなりません。

内蒙古南山根遺跡はそうした東北アジアにおける、独自の青銅器文化の展開があったことを我々に知らせてくれる、代表的な遺跡です。石槨墓という特殊な墓の構造をもち、遼寧式（琵琶形）銅剣を保有するなど非中国的な要素をしていますが、青銅の容器は中国的であり、また南山根遺跡出土の骨製飾り板に見られるように中国的な車馬を持っています。さらに青銅製の戈はこの車馬に伴う戦闘様式であり、決して非中国的な物ばかりみられるという訳ではありません。

東北アジアにおいてこうした中国的な物質文化が払拭されるのは、これより更に遅れ、戦国時代を待たなければなりません。このように遼河の西側では、中国の中原的な文化の影響が強く見られるのに対して、遼東地方から東は中国文化の間接的な影響を受け入れたに過ぎず、このことから却って独自の青銅器文化を展開させて来ました。韓半島全体に広くみられる支石墓などの墓制もそのひとつで、この遼東の青銅器文化こそ韓国、ひいては日本の歴史に大きな、そして重大な影響を与えたことは東亜大学校の沈奉謹先生が強く主張しておられることは皆様ご承知の通りです。

ご清聴ありがとうございました。

1991年９月13日韓国東亜大学校博物館での講演